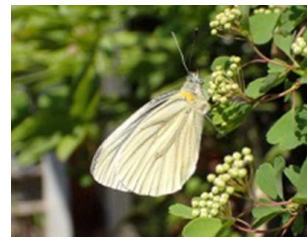


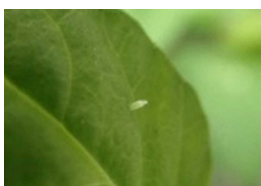
ルーツ

1. スジグロシロチョウ

モンシロチョウが飛ぶと春の便りなのですが、打吹山では見るできません。代わりに同じような一見モンシロチョウと思わせるチョウが飛びます。止まった時によく見てください。翅を閉じて静止しますので、裏面を見ることになりますが翅脈が黒色を帯びています。これがスジグロシロチョウという名称の由来です。モンシロチョウと一緒に飛んでいることはまずありません。



スジグロシロチョウ



卵



幼虫の青虫

に付いてきた史前外来種です。今でも幼虫の食草はアブラナ科の栽培種です。したがって畑や人家の周りで見られます。

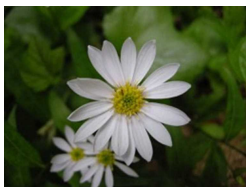
一方、スジグロシロチョウは日本の在来種です。食草はアブラナ科の在来種であるため畑などで見ることはありません。林縁を飛ぶ白いチョウは在来種と思って間違いのないのです。スジグロシロチョウの幼虫は、食べさせればキャベツなど栽培種も食べるのですが、イヌガラシなどの野生アブラナ科の種を好んで食べています。イヌガラシは道端の草地に生える草丈が最大でも数十cmくらいの多年草で、年中見られます。したがって、スジグロシロチョウも蛹で越冬する冬以外は成虫を見ることができます。

大陸の草原生まれのモンシロチョウ、林間の草地で生活していたスジグロシロチョウ、数千年の時を経ても混じることなくそれぞれの生き方を守っているのです。

2. ミヤマヨメナ

サクラの開花が終わると、打吹公園の羽衣池から飛龍閣の下が一面ミヤマヨメナの白い花で覆われます。株分かれで繁殖するため集団を作っているのです。木陰に生え、水分を好むため長谷寺下や峠の展望台南側下の谷筋にも見られます。打吹山の株は白花ですが、地方によって薄青紫色や薄桃色など変異があり、紫花はミヤコワスレという名称で園芸品種となっています。

キク科の花の特徴として、周辺にある1枚の花弁をもつ舌状花と内にあり花弁を持たない管状花が集まって1個の花のようにになっているため、これを頭花と呼びタンポポなどと同じ作りです。



明所の頭花

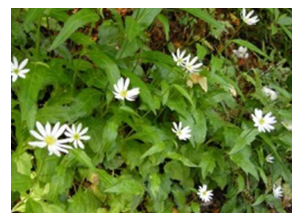


陰所の頭花

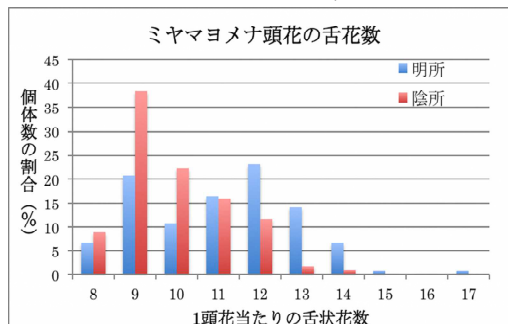
この頭花の大きさが場所によって異なります。集合している花数の多少は栄養の差と考え、落葉樹の下、常緑樹の下と光の強さに差がある場所の舌状花数を調べて見ました。グラフのように差がはっきり出ました。

また、個々の舌状花の大きさに差が出ていないか、8弁花と14弁花で周囲の長さから1花の幅を比較すると平均1.57mmと1.35mmで舌状花の

少ない方がやや余裕を持って並んでいる感じでした。



ミヤマヨメナ



(倉吉博物館専門委員 國本洸紀 2020)